

かわせみ通信

発行：神奈川県自然環境保全センター
自然保護課

住所：神奈川県厚木市七沢657

TEL：046-248-6682

野生動物救護の情報

バックナンバーは
HPから見られます→



傷病鳥獣救護の業務として、県民の方により持ち込まれた県内の傷ついたり弱ったりした野生動物（鳥類と哺乳類の一部）を収容し、必要に応じて治療や野生に戻すことを目標にリハビリを行っていて、そうした野生動物の「救護原因」や「リハビリ状況」などの情報をこの「かわせみ通信」に掲載しています。

野生動物救護展を開催しました

普段は見ることのできない野生動物救護業務の様子や身近な野生動物について、より多くの方に関心を持っていただくための企画展示「野生動物救護展」を8月16日から30日に開催しました。本館レクチャールームで、治療現場の様子や救護実績を紹介するパネルや、神奈川県内に生息する動物のはく製などを展示しました。

8月22日、23日には、獣医師の案内による治療現場の見学ツアーを実施し、職員と同じように感染症対策の防護服を着用して治療やリハビリを行う施設を見学しました。見学者からは、けがの程度や放野見込みなどの質問があがり、獣医師が動物の種類や生態により、リハビリの方法が変わることなどを説明しました。治療中やリハビリ中の個体を間近で見ることで、身近にいる野生動物の存在を実感してもらえたのではないかと思います。

レクチャールームでは、野鳥の羽根を利用したワークショップも開催しました。「自然発見クラブ」では、NPO法人野生動物救護の会が講師となり、標本を残すことの意味や鳥の体の仕組みを解説しながら各自で羽根標本を作製しました。「べたべたこわいぞ実験」では、ネズミ捕りなどの粘着剤に鳥がくっついてしまう状況を羽根で再現し、小麦粉などを使ってはがす作業を獣医師の解説を聞きながら体験しました。参加者は野鳥に関心のある方が多く、実際の体験を通して、楽しく野生動物救護の活動について知ることができたのではないのでしょうか。

今回はイベントの参加者も含めて、300人以上の方にご来場いただきました。来場者からは、「普段、日常生活の中で何気なくして



救護されてくる動物のはく製



動画やクイズの展示



現場見学ツアーの様子



リハビリ用の屋外ケージの見学



自然発見クラブ「羽根標本づくり」



べたべたこわいぞ実験

いることが生き物にとって危険となることが分かった。」「以前、家のベランダにいた子がシジュウカラの幼鳥だということがわかりました。何もせず放っておいて正解でした。」といった感想がありました。人間にとってはちょっとしたことで、野生動物に思わぬ影響を与えてしまうこと、反対に私たちが少し気をつけることで、救護が必要な動物が減ることなどに気づいてくれた方がいたようです。身近な野生動物との付き合い方や野生動物の治療や飼育の大変さなど、それぞれの発見や気づきを日々の生活の中でも活かしていってもらえると嬉しいです。野生動物救護展は来年度も開催予定です。



展示を見る来場者

フクロウのヒナがやってきた！

4月上旬、逗子市からフクロウのヒナが運び込まれてきました。枯れた樹木を伐採したところ、幹の中には穴が開いていて、フクロウの巣になっていたそうです。伐採中に親鳥は逃げてしまい、もとに戻すことができないと判断され、当センターでヒナを育てることになりました。

受入れ時のヒナはふ化したばかりで体重は30g未満、真っ白な産毛に覆われて、目も開いていませんでした。まずは水分補給をさせて、消化器官が正常に動いているかを確認したのち、手作りのミンチ肉などを与えていきました。体重を一気に増やしすぎても成長を妨げるため、毎朝の体重から給餌量を計算するなど注意深く成長を見守りました。また、この時期のヒナは本来巣の中で親鳥が温めていて、自分で体温を維持することができないため、ヒナが入っている箱の温度を30度以上に保つよう温度や湿度の管理にも気を遣いました。



保護1日目 手のひらより小さなヒナ



保温中の様子

2週間ほど経過するとようやく目が開き、自力で餌を食べられるようになりました。このころから外でのリハビリに向けて、徐々に室温を下げて外気温に慣らしたり、止まり木にとまる訓練が始まりました。

約1か月かけて外気温に慣れ、顔つきもフクロウらしくなってきた頃、いよいよ外の広いケージへ。神経質な鳥によくあることですが、外に出した途端に自力で餌を食べなくなり、一時強制給餌に戻ったりもしましたが、徐々に慣れてくれました。用意した活餌を捕食する瞬間を確認することはできませんでしたが、ケージに迷い込んだセミを自分で捕って食べるなど、成長を感じる出来事がありました。さらに外での水浴びや飛行訓練を経て、保護から4か月以上経った8月下旬に2羽のフクロウを放野することができました。



保護17日目
目が開き、自力で立てるように



保護60日目
外のケージで訓練中



保護110日目
エサを捕る練習中



保護139日目
すっかりフクロウらしい姿に

フクロウに限らず、野鳥のヒナを人の手で育てて自然にかえすことは何度経験しても試行錯誤の連続です。野鳥が自然の中で本来の子育てができるように、木の剪定や伐採時には子育て中の家族がいないか、まずは確認をお願いします。

野外施設の自然情報

自然環境保全センターの野外施設では、それぞれの季節に、生き物同士の巧みなつながりや、興味深い生命活動など、大自然の不思議な現象にふれることができます。この「かわせみ通信」では、野外施設の出来事や生き物たちの様子を紹介しています。

フクロウの巣から出てきたものは？

野生動物救護のページで紹介したフクロウのヒナ、やってきたのは「巣ごと」でした。フクロウは巣作りをせず、木の幹や枝の裂け目、古木の空洞など、十分な深さや広さがある天然の樹洞を探し、卵を産みます。今回一緒に来た巣は直径35cmほどのケヤキの幹にぽっかりと空いた空洞でした。

フクロウのヒナは肉食性で、親から与えられる小型哺乳類、鳥類、爬虫類などの小動物や、昆虫を食べて成長します。そして、これもフクロウ特有ですが、フクロウの親はヒナの食べ残しやフン、ペリットなどの吐き戻したものを巢外に持ち出すことをしないため、ヒナが育つに従って巢内はどんどん「ゴミ」が溜まっていきます。ヒナが巣立つ頃には、つーんとしたアンモニア臭が漂うほどだそうです。ということは、巢内にはヒナが育った痕跡が残っているかもしれません。これはもう、調べるしかありませんね。

樹洞をのぞいてみると、まず鳥の羽根が目に残りました。シジュウカラとスズメの羽根のようです。新しい羽根だったので、今回持ち込まれたヒナたちのために親フクロウが運んだのかもしれませんが。エサとなった鳥の羽根以外に、フクロウのお腹の羽毛も多数見つかりました。これは繁殖期にホルモンの作用でお腹の羽毛が抜けて抱卵斑（ほうらんはん）が形成された痕跡でした。抱卵斑のむきだしになった地肌には毛細血管が増えていて、卵を効率よく温めることができます。お腹の羽毛はまだ新しかったので、親フクロウが直前まで抱卵していたことがうかがえます。

次に巣の床材を掘ってみると、細かく砕けた木くずが堆積していました。実に40cm以上の深さです。堆積物の中からは、おびただしい数の小さい骨が出てきました。かなり時間が経ったものもあり、完全に形の残っている骨はそれほど多くありません。かろうじて、頭部の骨からリスやネズミ類、モグラ類、鳥類、トカゲの仲間の骨が判別できました。今回持ち込まれたヒナは、まだ孵化したばかりでほとんどエサは食べていなかったと思われます。ということは、これらの大量の骨は以前巣として利用されていた証拠。何層にもわたって骨が「出土」したことから、この樹洞は長い間何度もフクロウの巣として利用されていたことがうかがえます。



フクロウのヒナが入っていた樹洞



樹洞の内部



骨が大量に入った堆積物

フクロウの巣から 見つかったもの



シジュウカラの羽根



スズメの羽根



フクロウのお腹の羽根



ネズミ類の骨



モグラ類の骨



クリハラリスの骨



鳥のくちばしの骨

さらに堆積物の中からは幼虫がたくさん出てきました。全部同じ虫のようですが、幼虫の段階では種類が特定できず、土を入れたケースに移して成虫になるのを待つことにしました。2か月後、土から出てきたのは、シラホシハナムグリという甲虫でした。フクロウが巣を利用していない夏に樹洞に卵を産み、幼虫は細かく砕けた木くずや、ヒナの食べ残し、ペリット、フンなど食欲旺盛に食べて小さく分解していきます。

今回運び込まれた天然の樹洞から見つかったのは主にシラホシハナムグリでしたが、過去に野外施設に設置したフクロウの巣箱では、他にも昆虫が見つっています。ハエ類やコブナシコブスジコガネなどは、フクロウの子育て中に巢内に堆積した食べ残しなどに引き寄せられて飛来し、卵を産み、繁殖します。こうした昆虫の幼虫は巢内で掃除屋の役割を果たします。さらに、この掃除屋の虫を食べるために鋭いキバを持ったアイヌエンマムシもやってきます。フクロウの巣の中は動物性たんぱく質が豊富に存在する珍しい環境であり、それを利用するマニアックな昆虫たちが生息しています。その中にはコブナシコブスジコガネやアイヌエンマムシなど、フクロウの巣内で見つかるまで、生態が謎に包まれていた昆虫も存在します。

このようにフクロウの巣の中のものを調べてみると、フクロウと他の生き物たちとの関わりや巣の中にできあがった小さな生態系をうかがい知ることができました。フクロウが子育てに利用できるよう大きな樹洞ができるには長い年月がかかります。この環境がなくなると、フクロウだけでなくそこに関係するさまざまな生き物にも影響があるかもしれません。大きな樹洞の貴重さも改めて感じた出来事でした。

フクロウの巣を利用する昆虫



シラホシハナムグリの幼虫



シラホシハナムグリ



コブナシコブスジコガネ



アイヌエンマムシ

どんぐりむしの正体

秋に雑木林を歩くと地面にはつやつやと光ったどんぐりが落ちていて、ついつい拾ってしまいます。拾って満足して部屋に放置すると、白い小さなイモムシが出てきて阿鼻叫喚！となるところまでが秋の風物詩ともいえます。が、この白いイモムシ。一体なんの幼虫なのでしょう？

この幼虫はシギゾウムシの仲間です。冬になる前にはどんぐりから出てきて地面に潜るようなので、その後の様子を手作り観察ケースに入れて観察してみました。この観察ケースは薄さわずか10mmなので、幼虫の動向が観察できるというわけです。

晩秋クヌギのどんぐりから出てきたクヌギシギゾウムシの幼虫2匹をケースに入れると、早速モコモコと土の中に潜っていき、丸い部屋「蛹室（ようしつ）」を作ってじっと冬を越す体制を整えました。すでにどんぐりの中身を食べてお腹は満たされているようで、土に潜ってからは何も食べません。そして、動きのないまま半年がたち、存在を忘れかけていた6月中旬、ケースの上部でカサカサ音を立てている成虫を1匹発見。羽化してた！もう1匹は？とケースをひっくり返したところ蛹がコロンと出てきました。蛹室を壊してしまい申し訳ないことをしたと人工蛹室を作って観察を続けたところ、遅れること2週間後に2匹目も羽化。小さくても甲虫で、羽化したては白く柔らかかったのが、数日かけて茶色く硬くなっていました。（←人工蛹室だったのでよく観察できました！）どんぐりむしなんてよく目にするのに、その生態についてはちゃんと知らなかったのが、身近なところにも新しい発見があるものだと思ひ深く感じました。

シギゾウムシの仲間には、クヌギのどんぐりに産卵するクヌギシギゾウムシ、主にコナラのどんぐりに産卵するコナラシギゾウムシなどさまざまな種類がいます。もし、興味がわいたらどんぐりむしを育ててみてはどうでしょう？



クヌギのどんぐり



手作り観察ケースと羽化した成虫



クヌギシギゾウムシの幼虫から成虫へ